

国際会議での英語コミュニケーション体験

情報工学研究科情報システム専攻（電子情報分野）M1 姫田 佳子



今回、私の所属する松下・小田部研究室の5名の学生が明専会より大学院生奨学金を頂き、2004年11月23～25日に新潟市の朱鷺メッセで開催されました第17回国際超電導シンポジウム（ISS2004）に参加してきました。この会議は国際超電導産業技術研究センター（ISTEC）の主催によって毎年開催されている超電導に関する国際会議です。このシンポジウムに参加した人数は600名であり、内111名が海外参加者で世界24カ国から超電導に関する研究者が集まりました。

超電導と聞いて皆さんはどういったものを想像しますか？超電導というものを知らない、どういうものなの？と思う方も多いでしょう。超電導を表す最もよく知られた現象は「電気抵抗ゼロで電流が流せる」です。しかし、超電導はそれ以外にも通常の物質にはないような特徴的現象を示すことから幅広い分野での応用が期待されています。電力ケーブル、リニアモーターカーや医療現場で用いられるMRIにも超電導が利用されています。しかし、超電導の特性にはまだ解明されていないことや技術が最適化されていない分野も多く、今後更なる研究が必要とされている分野もあります。そういった意味では非常に面白い研究分野であるといえます。

さて、シンポジウムの開催内容は主に初日が全体講演、二・三日目にいくつかの分野に分かれての口頭・ポスター発表となっていました。私たちは全員ポスター発表だったため、ポスター発表時間以外はそれぞれの興味・関連のある分野の口頭発表を聴くことができました。しかし、当然のことながら全て英語…必死にスクリーンの資料から情報を拾わないと全く内容が理解できません。しかも、ネイティブの方たちは特にそのスピードが並ではありません。参加24カ国ですので、英語を母国語としていない方も多く、国によって話すス

ピード・発音が様々でした。こうなると、私にとってはかなりゆっくり話してもらえない限り内容の理解には及びません。口頭発表の聴講は私に英語のヒアリング力を向上させないといけないということを教えてくれました。

私のポスター発表は二日目にありました。発表時間中に数人の海外の方から質問を受けました。話しかけられる英語も私が聴き取れる程度のスピードでしたので、質問の意図を理解することができました。しかし、こちらの回答は相手方にはすんなりと理解してもらえず、図を描いてみるなどの身振り手振りを交えながらの説明となりました。それでも、最後には理解してもらえたので、そのときは小さな達成感を味わうことができました。

私にとって英語はコミュニケーションをとるための一つ的手段に過ぎません。英語が苦手だから海外の人となんて話せない、なんて思っている日本人は多いかもしれません。しかし、世界中の全員が英語を完璧に使いこなせている訳ではありません。文法や細かい発音に囚われずに、まずは単語の羅列からでもコミュニケーションをとってみたいことが大切だと思います。そうすれば、自分の中の世界を広げることができると思います。

最後に、今回の国際会議への参加を助成して頂いた明専会に厚くお礼申し上げます。



ポスター発表会場